

「蛇を踏む」論

——だいじだいじいーだいじなものはあ——

宇野憲治

川上弘美「蛇を踏む」は第百十五回（平成八年度上半期）芥川賞を受賞した。受賞の言葉として、「蛇のことを書いていただいた。蛇は春に穴からあらわれて秋に穴に戻るものである。蛇がいちばん動きまわる夏に賞をいただいた。なんとなくつじつまが会うようでおもしろい。」と、いままでの受賞者にはない、あつけらかなとした言葉である。年齢は三十八、お茶の水女子大学生物学科卒業でパソコンにも詳しく、パソコン通信「ASAHINET」で作品を応募し、二年前に創設（一九九五年）されたパスカル短編文学新人賞の第一回受賞者であるという、変わった経歴の持ち主である。このような作者だからこそ、重い主題を軽くリズムミカルに、象徴的に描き得たのかも知れない。

選者のひとり丸谷才一は、「蛇を踏む」の文学表現について、「書き出しもよく、真ん中もよく、結末もうまい。／＼ユーモアも質が高い。文章の足どりもしっかりしている。乱れたところが一箇所もなかった。」と最大の賛辞を述べている。しかし、川上氏に言わせれば、「文学編集者の厳しいチェックによる書き直しだった」ようだが、それはともかくとして、現実と非現実を交錯させながら描く「蛇を踏む」の文章力は大したもので、一機に最後まで読ませてしまう魅力ある文章である。

ここで、簡単に、「芥川賞選評」を紹介しておく。「人類の普遍的で根元的な深層心理のドラマに通じている、というより現代の日本におけるそのドラマの最新版」・「ハイテクの世界でも心の深みではわれわれは神話的元型の暗い領域を生死している」・「《蛇》と《人間》との神話的な戦いの物語であると同時に、自足的な《存在》と自覚的な《意識》との言語表現上の戦いの記録」（日野啓三）、「普段の暮らしのなかにたしかにある厄介なもの、迷惑なもの」・「自然的世界において生きることと、それと対立する歴史的世界あるいは文化的世界において生きることとの関係」（九谷才一）、「しつとりとして冷たい情感をたたえた文章」・「途中で三度シャワーを浴びた」（三浦哲郎）、「生と死にわたる超越的な感覚」（田久保英夫）、「蛇の世界を否定しようとする姿勢がおもしろい」・「変身への誘惑に対する戦いを足場にして生み出された、反変身的変身譚」（黒井千次）、「いきなりの蛇の登場を讀者に納得させるところはうまいし、ものすごい速さで流れてゆく部屋の中で蛇と互いに首を締め合っているという終わりも見事」・「この作品の受賞には全面的に賛成」（池澤夏樹）、「絶对的な真実を変身という裏返しの方法によつて描いたもの」（河野多恵子）と、選者諸氏の作品の本質に触れた賛成論が多数であった。

もちろん、否定的意見の選者もいる。宮本輝は、「蛇が人間と化して喋ったりすることに、私は文学的幻想を感じない。そんなものはイソップか民話で充分だと思つているので、私は最後まで「蛇を踏む」の受賞に反対意見をのべた。寓話は所詮寓話でしかないと私は思つている」と言つているし、石原慎太郎に至つては、「私には全く評価できない。蛇がいったい何のメタファなのかさっぱりわからない。メタフィクション流行の当節とは言え、こんな代物が歴史ある文学賞を受けてしまうとところにも、今日の日本文学の衰弱がうかがえるとしかしいようがない」と絶対否定に近い発言である。これら選者諸氏の賛否を念頭におきながら、以下、私なりに「蛇を踏む」を考察していくことにする。

一 現実と非現実

「みどり公園へ行く途中の藪で、蛇を踏んでしまった。」と、冒頭部から、ハッと驚かされる書き出しである。最初の一行を読むだけで、次に何が起ころのだらうという、奇妙な誘惑にかられる。「踏まれたらおしまいですね」と蛇が言い、もうその時点で、読者はすんなりと「蛇の世界」に参入してしまうのである。蛇がしゃべること自体尋常ではないが、昔話・民話・説話・童話等になじんでいる我々の感覚からして、いかにも自然であるかのような錯覚に陥ってしまう。現実の日常から非現実の世界へ、この作品は、いわば現代の説話といつてよいのかも知れない。

それからどろりと溶けて形を失った。煙のような霞のような曖昧なものが少しの間たちこめ、もう一度蛇の声で「おしまいですね」と言ってから人間のかたちが現れた。

とある。忍術を使うかのように、蛇は女の人へと変身してしまうのである。ここまで読んで来た人なら、なんの抵抗もなく、「蛇の世界」を受け入れてしまう。奇妙ではあるが、無駄のない見事な書き出しである。

夏目漱石の作品に「夢十夜」というのがある。作品の分析は別稿に譲るとして、「夢十夜」の夢を通して、漱石の人生観が象徴的に語られている。この「蛇を踏む」も、漱石の「夢十夜」と同様に、作者の人生観がよく出ているのではないかと私は思っている。

一方、女の形に姿を変えた「蛇」は、「わたしヒワ子ちゃんのお母さんよ」と何度も言う。ヒワ子はそんなはずはないと思いつつも、

急に心配になって実家に電話をかけるために立ち上がった。番号がうまく思い出せなくて、二回かけそこなっ

た。夢の中で電話をかけることができないときに似ていた。

「もしもし」三回目で母が出て、電話の向こうで「あらヒワ子ちゃん」などと言う。

とある。主人公の、現実と非現実を揺れ動く心と、読者のそれとを同じくさせることにより、何が起ころうとも、読者にはどんな違和感も抱かせないのである。振幅を同じくしながら自己納得をさせるこのような筋の運びは、大変緻密で入念である。

二 言葉のもつ重層性

ワープロやパソコンの特徴として、入力時における変換機能がある。かな入力・ローマ字入力のいずれの場合も、カタカナに漢字にと、文脈に合うように変換してゆく。

ミドリ公園、カナカナ堂、コスガさん、サナダさん、ニシ子さん……、漢字を当ててもよいような名称をカタカナのままにとどめることにより、読者に様々な想像をめぐらさせることになる。その言葉の連想が、作品世界をふくらませて行く。蛇、ミドリ、サナダ……、お寺・死・カナカナ堂（蟬の鳴き声を連想させる）、ニシ子（西方浄土を連想させる）、等と縁語的に世界は広がってゆく。音ひとつにしても聞く人によって重層性を帯びてくるように描写している。

「威銃だね」何も聞かないうちにコスガさんが言った。「サナダさん知っているかね」……

都会で育ったコスガさんはその音を知らず、最初のうちはニシ子さんを追いかけてきたニシ子さんの夫が自分めがけて撃つ銃の音に思えてならなかったと、笑いながら話した。店を開いたころにはニシ子さんが京都の

家を出てから三年以上もたっていたのね。そうコスガさんは言い、両切りピースに火をつけずにしばらくわえていた。

「演習の音かと思っていました」私が言うと、コスガさんは、え、という顔をした。「自衛隊の」重ねて言うとうと……

とある。威銃とは、「田んぼに来る鳥や獣を追い払うために撃つ爆音だけの銃」なのだがコスガさんには「ニシ子さんを追いかけてきたニシ子さんの夫が自分めがけて撃つ銃の音」として聞こえ、サナダさんには「自衛隊の演習の音」として聞こえたのである。「蛇を踏む」という作品では、このような言葉、または音のもつ重層性をうまく作品世界に生かしているのである。

「ピース」という言葉が何度も使用されている。もちろん表面では煙草の銘柄であるピースなのではあるが、その使用されている箇所とピースとの関係を見ると、単なる煙草のピースだけにとどまらない。

・コスガさんは驚いたように「あれっ」と叫んだ。

「その蛇、それからどうしたかね」

両切りのピースをくわえながら、コスガさんはゆっくりと禿げ上がった頭を……

・「自衛隊の」重ねて言うと、コスガさんはピースをくわえたまま口を「ああ」のかたちにした。ピースはコスガさんのくちびるに貼りついたままくちびると共に上方に移動した。

・「何ですか」ニシ子さんが聞くと、コスガさんは指をくちびるに当てて「しっ」と言った。

「あれ」

「ああ、あれ」

聞かないふりをして伝票をつけながら背後を窺ったが、もうそれ以上二人は何も言わなかった。ピースの匂いがして、コスガさんのため息が聞こえた。

・コスガさんが流されていく私に向かってウインクしながら言う。練習なんかじゃないんです。練習している間にすぐわれちゃいます。そう言い返すが、コスガさんは顔をてのひらで撫で上げ、両切りのピースをくわえていつものように平然としている。

といった四箇所である。「ピース」という言葉は、心の安定を乱す事柄、また世の中の動きから「戦争」を暗示する箇所で使用されている。とすると、この言葉の原義である「平和」という意味が、もう一つの意味として背後にあり、煙草を飲むコスガさんの姿を通してそのことが暗示されていると思われる。

また、コスガさんの口から出て来る「だいいじだいいじだいいじなものあゝ」という歌は、作品のテーマとかかわって象徴的に使われている。

・「戦争の練習ね。練習は大事だよ。大事大事」

コスガさんが言い、私は何と答えていいのかわからずに少し首を横に振った。だいいじだいいじ、大事なものはあり、貸し金庫、コスガさんが小さな声で歌いだし、……

・「どうしても駄目か」

コスガさんは強いような言葉を言いながら、また「だいいじだいいじ」と、今朝と同じ歌を鼻の先で歌いはじめた。

・コスガさんの歌っている歌をどこで聞いたのか思い出した。駅前信用金庫が地区祭りのときに出す山車から流れる歌だった。どうやって作詞作曲したのか、演奏したのか、テープにエンドレスで吹き込まれた「だ

いじだいいじい」の歌は、山車が練り歩く間じゅう流れつづけていて、祭りの日も休まず店を開けていたカナカナ堂の奥にほんやりと座りながら、「だいいだいいじい」が頭の中にしみ込むのをどうにか阻止しようとした覚えがあった。しかし、「だいいだいいじい」は、しつかりとしみ込んでしまっていた。

・カナカナ堂の前を花や踊り子をぎっしり詰め込んだ祭りの山車がにぎにぎしくひかれ、山車からは信用金庫の歌が大音声で流れていた。だいいだいいじい、だいいじなものはあり、その練り返しが円環のようにカナカナ堂を取り巻き、

とあるように、この歌に関しても四箇所ある。冒頭部分・中間部分二箇所・最終部分と、全体に渡って配置されており、作品全体の中を「だいいだいいじい、だいいじなものはあり」の歌が通奏低音となって鳴り響いているのである。「頭の中にしみ込むのをどうにか阻止しよう」としても、「しつかりしみ込んでしま」っている歌なのである。戦争にとつて大事なものは練習、信用金庫にとつて大事なものはお金、ヒワ子さんにとつて「だいいじなものは」……？この作品を通読することによって、我々読者にとつて「だいいじなものは」とは何かを深く考えさせてくれる。ところで、「蛇を踏む」ことと「だいいじなものは」とはどのような関連をもっているのだろうか。「だいいじなものは」を何かを念頭におきながら、以下、視点を変えて、この作品の分析・考察を進めて行こうと思う。

三世代

「蛇を踏む」の中には、五つの異なった世代の人たちが登場する。

ヒワ子の曾祖父の世代、願信寺の住職と大黒さんの世代、カナカナ堂のコスガさんとニシ子さんの世代、ヒワ子

さんの世代、そして、ある寺の息子さんの世代である。これら五世代の人たちの他人との関わり方（夫婦関係を含めて）、世間との関わり方、また「蛇」の付き方に着目して、作品を検討してみたい。

まず、ヒワ子さんの曾祖父のことであるが、

曾祖父という人はお百姓で、五反の田んぼと茶畑を持っていた。ある日出奔した。しばらく音沙汰がなく、曾祖母は五人の子供をかかえて野良仕事を一人でこなした。三年後の春に帰り、曾祖母との間にどんな話がなされたかはわからないが、結局何事もなかったかのように元のさやに納まった。

とある。曾祖父は、明治時代の男尊女卑的な家父長制の敵として存する現実を生きた人である。「明治時代はかく父権が強く女は出ていった男が帰っても責めることすらできなかったゆえに女性はもっと自我に目覚めねばならぬのか」と作者は記しているが、そのような家父長制が生きていた世代である。

次の願信寺の住職と大黒さんの世代であるが、住職は人間的にも大きく、大黒さんのすべてを受け入れていると言つてよい。

蛇の女房はいい。世話女房だ。家の切り盛りはうまいし計算もできる。夜のことだつて絶品だ。癩性のところもないしだいいち無口だ。

とある。「蛇の女房」と突然出てくるので、少し驚きもするが（「蛇」の象徴性と女性への「蛇」の付き方については後述するとして）、お互いの良さを認め合いながらの、夫婦仲のよい夫唱婦隨の世代といつてよい。年齢的には八十歳前後というところであろうか。

コスガさん夫婦の世代となると、また異なった様相を呈してくる。

・ ニシ子さんは六十過ぎだが、白髪も少なく八歳年下だというコスガさんよりも余程若く見える。コスガさ

んが若いころ修業にと入った京都の老舗の数珠も作るし店も切り回すし、その店の若旦那があまり店に寄りつかず外で遊んでばかりいるのに朝から晩まで休む間もなく切り盛りをしていたニシ子さんにコスガさんが横恋慕して、結局数年後修業を終えたコスガさんがニシ子さんを口説いて駆け落ちをしたという……

- 実はもう二十年も前からうちにも蛇がいる。ニシ子についてきたものらしくて、ニシ子の叔母だと名乗る。
- サナダさんはパソコン使えるかね、とコスガさんはときどき言うが、在庫管理にパソコンを使うほどカナカナ堂は大きな取り引きをしていないから、とニシ子さんが答えると、コスガさんがすぐにそうだねえと言って話はおしまになる。しかしまたしばらくするとコスガさんは、サナダさんパソコンで便利かねと言いだす。言いだすが、それきりだ。

とある。駆け落ち結婚であり、世間の目をはばかって、「辺鄙なこの土地ではそほと商売が続いている」夫婦なのである。世間に対して厚い壁をつくっている。ニシ子さんが年上ということもあり、女性主導型の夫婦といつてよい。そのニシ子さんには「二十年も前」から「蛇」が付いているのであり、それは、駆け落ちの時期と機を一にしている。

パソコンに関しては、ニシ子さんは否定的である。コスガさんは多少気にはしているが、自分では使えない世代なのである。その点ヒワ子さんは、理系出身でもあり、かなり自由にパソコンを使う世代である。

ヒワ子さんについて見てみる。

- ミドリ公園に行く途中の藪で、蛇を踏んでしまった。
- ミドリ公園を突っ切って丘を一つ越え横町を幾つか過ぎたところに私の勤める数珠屋「カナカナ堂」がある。カナカナ堂に勤める以前は女学校で理科の教師をしていた。教師が身につかず四年で辞めて、それから

失業保険で食いつないだ後カナカナ堂に雇われたのである。

・「消耗したからかもしれない」

教師に対して生徒が何か求めてくることは少なかつたが、求められているような気がしてきて、求められないことを与えてしまうことが多かつた。与えてからほんとうにそれを自分が与えたいのか不明になって、それで消耗した。与えるという気分も嘘くさかつた。

とある。ヒワ子さんは、教師生活に疲れ、消耗して生きる自分に愛想をつかして教師をやめたのである。三十歳前後で目下独身、空虚な毎日で、「失業保険で食いつないだ後」、カナカナ堂に勤めることになったのである。ここに勤め始めて後、「蛇を踏む」のである。今まで、「蛇を踏む」ことはなかつたわけで、カナカナ堂・数珠・寺・因縁……死への無意識なる接近があつたからこそ、ヒワ子は「蛇」を踏んだと言つてよい。ニシ子の世代とは、生き方の上においても考え方においても大きく異なっている。

それよりも若世代として、ある寺の息子がいる。

寺を継いでほしい息子さんがアメリカに行つてしまつて困つているという。アメリカで古着を買いつけてきて日本で売りさばく。古着など今の日本で売れるのかと聞くと、なんでも稀少価値のあるジーンズで、一本数万で売れることもあるそうだ。

「若い人の間でそういうのはやつてるの？」コスガさんに聞かれたが、知らないで「さあ」と言うのと、コスガさんは不思議そうな顔をする。「そういえばサナダさんはこのごろの若い人と違う服着てるね」

という箇所である。「蛇を踏む」世代どころか、蛇を蹴散らす世代である。少しでも珍しいものにプレミアを付けたり、少しでも珍しいものがあると異常なまでに好奇心をかきたてる。スニーカー現象、タマゴツチ、サザエボン、

プリクラ等……まさに何をでも商品化し、それに異常な情熱をもやす奇妙な世代である。ヒワ子の世代とも一線を画している。

このように作品中に描き出されている五世代の思考・生活態度は、作者の筆使い？によって明確に区分されている。世代の特徴をよく把えた人物描写だといってよい。

四 蛇と女性

主要登場人物は七人であるが、「蛇」と深く関係があるのは女性のみである。しかも、蛇の付き方は世代によって違う。その違いは何を暗示しているのだろうか。この蛇の女性への付き方は、この作品の主題とも大きく関わっている。

まず、大黒さんと蛇との関係である。

中筆筒の引き出しがずっと動き、中からたくさんの蛇が這い出た。大黒さんに向かってどの蛇もなめらかに這っていく。大黒さんはいちいち蛇を掴んではふところに入れた。生暖かい風が寺のまわりを吹いている。すべての蛇をふところに収めると、まずコスガさんのところまですすつと歩いていつて、コスガさんに巻きついてからコスガさんの額をひと舐めた。次に私のところに来て同じようにした。

とある。大黒さんは「蛇女房」と言われるだけあって、蛇と一体化しており、多くの蛇を従えている存在でもある。「蛇女房」であると同時に「蛇姉御」でもある。蛇との距離は全くなく、蛇の世界にどっぷりとつかり、多くの蛇を従えている。

それに対し、ニシ子さんと蛇との間には距離がある。もともとニシ子さんには蛇は付いていなかった。蛇が来たのは「二十年」ほど前からであり、それはニシ子さんの駆け落ちの頃と機を一にしている。

ニシ子さんの叔母だと名乗る。最初は邪魔だし気味も悪いしどうにか追い出そうとしたが、追い出せない。何かと追い出せないめぐりあわせになってしまふのだ。急に親戚が危篤になったり夫婦仲がしっくりいなくなったり怪我をしたり、いざ追い出そうとする態勢になるとそんなことがつづげざまに起こった。お祓いをしてもらったこともあったが、祓う方も特に悪いものは憑いていないなどと言う。祓つてもむろん消えない。そのうちいることが自然になって、いてもいなくても気にならなくなった。ところがこのごろ蛇が死に際になくなつたらしく、人間の姿を取れなくなってきた。

と描写されており、この箇所だけをみると、蛇の世界とは、目に見えない霊界であり、宗教の世界・主義・思想の世界のようにも思えてくる。「追い出そう」とすると災いがふりかかってくるようになり、厄祓いをするものの、何の甲斐もない。「そのうちいることが自然」になり、いつの間にか蛇と馴染んでしまっているのである。そして、ニシ子に付いた蛇は次第次第にその力を失い、死に近づいて行く。ニシ子は、「蛇になりたかった。どうしてあるとき蛇の世界に行かなかつたのかしら」とは言うものの、ついに蛇はつぶれ死んでしまふ。蛇が死ぬと同時に病の床に臥したニシ子さんについて、コスガさんは、「ニシ子さんは死ぬかもしれないなあ」というのである。

「ニシ子さんはいかがですか」

「コーヒーをすすりながら聞くと、コスガさんは目をしょぼつかせた。

「それがね、思ったよりも回復が早いよ」

嬉しそうな口調なのに、コスガさんの色はまだ薄い。ニシ子さんは這うようにして布団から出て、赤ん坊が歩

くことを覚えるようにつかまり立ちから伝え歩きを経て、今ではもうゆっくりと家の中を歩きまわっているという。

とある。蛇の死とともに死ぬのではないかと思われていたニシ子さんは、奇跡的に回復し、何とか元の生活にもどってくる。今のところ蛇はいなくても無事なのである。しかし、ニシ子さんの心奥には、いつまでも蛇への思いは残っている。

「ニシ子さん、蛇はもういいんですか」

コーヒーを入れるニシ子さんに向かって訊ねたことがある。ニシ子さんはしばらく考えてから、

「よくないわ、忘れられるはずがないでしょう」と答えた。

「そうですか」

「また蛇が来たらこんどこそあたしは蛇の世界にいつちやうかもしれないわよ」

「ほんとですか」

「そうねえ、来るのは違う蛇だろうからそのときはそのときかもしれないわね」

と言う。二十年前からニシ子さんについていた蛇が死ぬことよって、一応の決着はついたものの「また蛇が来たらこんどこそあたしは蛇の世界にいつちやうかもしれない」と言うのである。そして、次に来る蛇は「違う蛇だろうから」ともいう。

大黒さんはもとから蛇が付いており、蛇と一心同体であるのに対し、ニシ子さんの蛇はコスガさんと駆け落ちしたとき付いた蛇であり、追いつくとするが結局追いつくこともできず、ずるずると同居してきた蛇なのである。そして、その蛇が死ぬことよって、一応は蛇の呪縛から解放されるのである。

最後に、ヒワ子への蛇の付き方を見ておく。

「蛇を踏む」まで、蛇はヒワ子には付いていなかった。「女学校の理科の教師」をやめ、数珠屋「カナカナ堂」に勤めるようになって初めて「蛇を踏」んだのである。「踏まれたらおしまいですな」と蛇は言い、女性に変身して、ヒワ子の部屋に住み着くことになる。そして、しきりに「わたし、ヒワ子ちゃんのお母さんよ」といい張るのである。蛇が何と言おうと、ヒワ子自身その蛇の言葉を信じるはずはない。しかし、蛇があまりにも確信をもって言うので、ヒワ子自身、「急に心配になって実家に電話をかける」のである。案の定、母は故郷の静岡に健在である。ヒワ子は自己納得しながら電話を切るが、その間、「女は電話をかける私を見もしないでぱくぱくと食べたりしている」のである。そして巧みに話題を転換しながら、ヒワ子の心の弱みに立ち入ってくる。そして、少しでも蛇に都合が悪いとなるとさっと身を翻して、

「もう寝るわ」

突然女が言つて、……すると柱にからまりながら天井に戻つた。天井に描かれた蛇のようなかたちになつて、目を閉じた。

というのである。手の平を返すかのような姿態である。コスガさんはヒワ子さんから「蛇を踏」んだ話を聞いて数日後、「追い出さないよ。来たら」とは言ったものの、既にヒワ子さんの部屋に蛇が来ていることを知ると、

「追い出さないよ」

「そうですか」

「できればさ」

「できますか」

コスガさんは答えず額を手のひらで撫であげた。……「なんまんだぶなんだぶ」と言い……「よくわかんないけどさ、しよわなくていいものをわざわざしようことはないでしょ」

と注告する。コスガさんの言葉には一種の諦念的な響きがあるのである。ヒワ子さんにはその言葉の意味がよく理解できない。

ヒワ子は、蛇との同居は多少気味の悪いものではあったが、「つくね団子がおいしそう」とつい手を出したり、「ビールを飲むと一杯だけ飲んでしま」ったりするのである。「飲んでしまうとおかずに箸がのび、もう一杯のビールをつぎ……」となってくる。追い出そうとしていた蛇なのであるが、いつの間にか「蛇の考えが真ん中に来て」しまふ。ひとり暮らしのヒワ子にとって、何かと便利で慰めとなる蛇である。そして、そうなければますます安心して、「ヒワ子ちゃんが木から落ちたときのこと」

木から落ちた覚えなどなかった。しかし女はつづけた。

「お隣のゲンちゃんが、ヒワ子ちゃんのおかーさん、ヒワ子ちゃんが落ちちゃったよー、って叫んだんであたしはびっくりして腰が抜けそうになった」

と、ヒワ子の記憶にないような幼少の出来事であたかも本当の母親のごとく自信をもって語るのである。本当の母親でないとする、この蛇は過去の出来事を見通し、本人の記憶にないことまでも言い当てる心霊術を心得ているといつてよい。今日の世の中にも、霊視とか霊能とか称して、本人も知らないことを言い当てる人たちがいたり、宗教があつたりするが、本人の記憶にないような事柄を指摘する蛇の言葉は、相手の意表をつき、巧みに人の心の隙間に奥深く入って行く魔力がある。疑いを懐かせながらも信用させて行く巧妙な手口である。最初、違和感があつた蛇であるが、「共に暮らし初めてみるとなじんてしまふ」ものである。

そして、「女は頬ずりをしながら私に両腕を巻きつけ」、ながら、

「ヒワ子ちゃん、蛇の世界はあたたかいわよ」

「ヒワ子ちゃんも蛇の世界に入らない？」

と、「蛇の世界」に誘おうとしきりに呼びかけてくる。そして、その呼びかけは、

「ヒワ子ちゃん、ヒワ子ちゃん」とも「シユルルルウシユルルルウルウルウ」とも聞こえる音が鳴りつづいている。

風が強い晩に聞こえるような不思議な音だった。

としきりに誘いつづけている。ついには、「あたまの中が蛇で満たされ、蛇のイメージが遠心的に体の各部へ伝わってくるようになるのである。「蛇になどなるまいと念じながら、蛇の用意したものを余さず丹念に噛んでのみこ」んでゆくのである。まさに、心理学でいうところの「プラーシーボ効果」のあらわれである。

ヒワ子ちゃん蛇はいいわよ、蛇の世界は暖かいわよ。声が世界中の窓から降り注ぎ、私は降り注いだものでびしょ濡れになる。

一方で、ヒワ子ちゃん、ヒワ子ちゃん、……蛇になぞなつてはいけませんよ、ヒワ子ちゃんはヒワ子ちゃんなんですからね。

と、母の声が聞こえ、「蛇も母も巨大化しながら果てしなく言い争」うのである。

ヒワ子の夢のような場面であるが、蛇によつて洗脳されようとするヒワ子と、洗脳されるのをくい止めようとする内なる母の声との葛藤の始まりとみてよいかと思う。この場面は、宗教・思想等における洗脳という方法に酷似しており、まさに「蛇の世界に入る」とは、ある宗教に入信する、ある思想団体に加盟するということにならうか。

蛇はあまりにもしつこくヒワ子を誘う。そして毎晩やってくるのである。

毎晩襲いくる蛇の気配で睡眠不足がはなはだしい。いっそのこと蛇の元に下ろうかと思うこともしばしばだが、私の奥にある固いものがどうしても私を蛇に同化させてくれないでいる。

とあるように、ノイローゼになろうかと思うくらい頻りにやってくる。ここでの「蛇」は相手の都合もかまわず折伏とかオグルに訪れる人たちを想像してもよいと思う。しかし、「私の奥にある固いもの」が、それを最後まで拒むのである。「情」に対しての「理性」と言ったらよいのかも知れない。

蛇なんかもともと興味はなかった。今だっただいしてない。ただ向こうからやってくる。やって来ては蛇の世界に來い來いと誘う。蛇の世界なぞには行きたくない。いくら行きたくないと断つても、蛇は後から後からやってきて誘う。

のである。それでも耳を貸そうとしないヒワ子に、蛇は強引さを増してくる。「日がたつにつれてせっつくようなもの」となり、一方で、「せっつきが強くなるに従ってかたまりは固く大きく」なっていくのである。

宗教でも思想でもその世界に入るタイミングが重要である。理性的に受け止め、頑なに拒否し始めるや相手の攻撃は強くなり、その世界に入るまで放そうとはしなくなる。「ヒワ子ちゃん。もう待てない」という女（蛇）の言葉はよくそれを表している。「女が攻撃し、私が受ける」のである。攻撃が強ければ強い程、一端拒否し始めた自分の心の中には、その拒否反応が強くなる。と同時に、いまままで曖昧にしていたものを一気に白日の下に晒したくなるのである。ヒワ子は思い切って言ってしまおう。

「蛇の世界なんてないのよ」できるだけはつきりとした声で言った。遂に言ったと思った。今まで不明にしてきたことを不明でなくした。わからないふりをしていたことがわかった。ただし何百年も争ってきたわりには

いやに単純なことではあった。

とある。明確にしてはならないことを明確に言葉で言うことにより、「蛇の世界」を全否定してしまうのである。全否定するものを否定しようとする。

・「ほんとかしら」女が笑いながら言った。

「そんなにかんたんなことかしら」首を締めにかかる。

・「こちらに来ればわかるのよ。来ないで何を言うの」

「行くも行かないも、そんな世界はないんだから」

女はぐいぐい首を締める。気持ちいいんだか苦しいんだか、女は相変わらずへんな顔だ。それならばと思つて女の首を締め返す。青く放電するものであたりは目も開けていられぬほど明るく輝き、その中で私と女は互いに同じくらいの力で首を締めあう。部屋はすごい速さで流されていく。

というのが最後の場面である。蛇は蛇で強引に蛇の世界へ連れていこうとし、ヒワ子はヒワ子で、蛇の世界そのものを拒否する。両者の葛藤がこの作品の結末となるわけだが、たまたま「蛇を踏む」ことによって、このような葛藤の世界へ巻き込まれてしまったのである。その後のヒワ子の運命については描写されていない。

宗教、思想、主義……、あると思えば、そこには教義的に自己完結した世界があり、その世界に身を委ねてしまえば安楽なものである。自己完結しているが故に全幅の信頼がおけるし、その世界の中では疑問の余地はない。しかし「そんな世界なんかない」と思うヒワ子のような人にとっては、本当にないのである。「蛇の世界」がある方が幸福なのか、ない方が幸福なのか。蛇とヒワ子の葛藤のように、われわれにとっても永遠の課題なのである。それはともかく、「蛇を踏」んだヒワ子は、一旦蛇と同居し蛇に近づきながらも、最後には、はっきりと蛇を否定す

るのである。それはあたかも、思想・宗教・主義等に近づきながらも、最終的には、それを一種の幻影として明確に拒否していく態度に酷似している。

以上、蛇と深く関わりがあった女性三人を詳しく見てきたわけであるが、世代によって、蛇の付き方は大きく変わっているといつてよい。即ち、大黒さんの世代は、蛇そのものの世界に生きており、信じ疑わぬ世代である。ニシ子さんの世代は、関心は充分ありながらも信じ切れず、かといって否定することもできず、蛇が死ぬまでずるずると付き合い同居していける世代である。ヒワ子さんの世代は、「蛇なんかにもともと興味はなく」、はじめから信じてかかろうとしない。だからあまり強く誘われると拒否反応をおこし、明確に「蛇の世界なんてないのよ」断言できる世代である。

三人の女性の世代による蛇との関わり方は、象徴的・典型的であり、宗教・思想・主義等と人との関わりと酷似しているといつてよい。三人の世代は、いわば、親子三代といったところであり、戦前・戦後・現代の宗教・思想、「国家」と「個人」との関わりと考えることもできよう。

五 蛇の世界

話が前後するが、最後に、「蛇の世界」とはどのような世界かを見ておこうと思う。

ヒワ子は、蛇といると何らかの安らぎを感じているのである。

最初から壁を隔てたような遠い感じが蛇にはなかった。コスガさんの言うコノゴロノワカイヒトと話をするときにも壁はあって、たとえば私が教師をしていた時の生徒だとか同僚だとか、それをいうならば母にも弟に

も、薄かったり厚かったりするが壁というものはあつて、壁があるから話ができるともいえるのであつた。

蛇と私の間には壁がなかつた。

とある。また、

蛇といえ、思うことが少しあるのだ。人と肌を合わせるときのことである。その人たちと肌を合わせる最初のとき、私はいつも目をつぶれない。

最初のときが過ぎて何回かその人たちと肌を合わせるならば、次第に私の目は閉じはじめ、固かつた皮膚の表面がゆるりと流れだし、そのうちに知らず知らずと形が変わつてくる。……その人達の姿はいつも一瞬蛇に変わるのである。

このような箇所を見ると、男女の世界をも想起させられる。

現代社会においては、全体に自己を同化させて行くよりも、個と個の間に皮膜をつくり、自分を守ると同時に、他人と関わらないようにしなければうまく生きていくことができない。皮膜をつくれれば、周囲のことを考える必要もなく他人を立てる必要もない。他人は傷つけても自分が傷つかないように努力するだけである。隣人はもちろん、友人に対しても親に対しても、一つの壁を隔てた人間関係となる。

人は正面から自分を見つめ、個人主義を追いつめて行くと孤独に陥る。その孤独の究極は絶対孤独であり、絶対孤独に陥つた人間は、自殺するか精神的狂気になるしか道は残されていない。自分を誤魔化し、他にその代償を求めて行けば、それはそれで孤独から免れることはできる。しかし、普通そこには精神的空虚さが常につきまとうのである。そのような時にあつて、壁をとり払つた男女の愛欲の世界は「蛇の世界」に近いのであつて、その愛欲にふけることによつて、一時的にはあるが、孤独を忘れることができるのである。蛇はしきりに、「蛇の世界はあ

たたかいわよ」と繰り返すが、それは擬似母親的世界であり、その世界に入ると現実の孤独を忘却させてくれるのである。その世界に入り切れない人は、現実の深い孤独と正面から向かい合わざるを得なくなる。

「蛇の世界はあたたかい」、「蛇の世界はあたたかい」……それは現代に生きる孤独な我々への呪文であり、コスガさんの唱える「なんまんだぶなんまんだぶ」に近い響きをもっている。その世界に入ってしまったえば、孤独から開放され、仲間・同志・同行者ができ、自分自身の内面と、正面から向かい合わなくてもよくなるのである。一方では、まさに「蛇の世界」は、宗教・思想・主義等の絶対完結の世界でもある。それに自己の身をゆだねることは、自分の孤独と向き合わなくてもよい安楽な世界なのである。

しかし、「蛇の世界」を、宗教・思想・主義のみの世界と考えなくてもよい。現代に生きる我々の身近にある社会・会社・組織・所属団体等と考えることもできよう。自分と向き合うのか、それとも正面から自分と向き合うことを避けるのか。顕著なものとしてはオウム真理教的なものも念頭にあらうが、現代に生きる若者は、この二者択一を迫られている。

大黒さんの世代は幸せである。すべて信じられる世代であるから。ニシ子さんの世代は幸せ半ば不幸半ばである。半信半疑の世代、リストラの対象となる世代であるから。自己と正面から向かい合い、はつきりと選択しながら生きなくてはならないヒワ子さんの世代は、大変しんどい。それは、すべてが信じられない世代であるから。

一見自由にみえる現代の世を生きながら、「蛇を踏む」ことによって、安楽に生きるか、自分の孤独と闘って生きるか深く考えさせられる。価値観が多様化した今日の時代にあつては、「蛇を踏」んだとしても、気ぜわしく気付かず通っていく人が多い。各人が各人の「蛇を踏む」ことよつて、「蛇の世界」とは何か、「だいいだいいだいいじなものはある」何かを問いつづけながら生きて行かなければなるまい。それは、人が、ある時、死というもの

に目が向いた時にはじめての覚えてくるものなのかも知れない。

その意味で、川上弘美「蛇を踏む」は、私に種々な意味での「生きることとは何」かを、また、「だいたいだいたい
くだいじなものあり」何か、を深く考えさせてくれた作品であったように思う。